
雪合戦

菜央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪合戦

【Zマーク】

Z3692D

【作者名】

菜央

【あらすじ】

組織の情報がなかなか手に入らないコナンは思い耽っていた。そんなとき、雪合戦をやることになるが、コナンはしぶしぶといった様子。初投稿です。至らない点、多々あります。が最後まで読んでいただけたら幸いです。

ゆきやこんこん
あられやこんこん
ふつてはふつては
ゆきはつもる

少女は彼の隣でこの歌を歌っていた。

その声を聞きながら彼はストーブの暖かさで曇つた窓の外を見ていた。

「なあ！もうかなり雪積もつてんじゃねーか！？」

少女・歩美と一緒に阿笠邸へ来ていた元太が言った。

「まだですよ。さつき降り始めたばかりじゃないですか。」

同じくして一緒に来ていた光彦が、元太を諭すように話した。

冬休みに入つてからほぼ毎日のようにこの3人は阿笠邸へ訪れていた。

今日も予定を立てるわけでもなく、ただ遊びに来たようだ。

彼は毎日毎日、よく飽きもせず、と呆れながらも平和だなど微笑んでいた。

そんな彼も最近はよく阿笠邸へ来ていた。

「ねえ、コナン君。今日は何をしようか？」

そう、彼はただこの3人、自称少年探偵団に付き合わされていただけだった。

見てくれば小学一年生。周りから見れば仲の良い子供たちね」と感じる。

しかし彼自身、違和感を感じずにはいられない。なぜなら中身は今より10才上の17才だからだ。

「ねえ「ナン君聞いてる?」

「ああ、悪い。なんだっけ?」

別のことを考えていた彼は、全く少女の話が頭に入っていなかつた。

「つたくよー、ちゃんと聞いてろよな。」

「そうですよ。最近きみはぼーっとしそぎですよ。」

「そうかもしねない」と思った。

この少女のことになると、必死になる彼らに呆れながらようやく彼は話し合いに参加することを決めた。

「悪かつたつて。あれだろ? どうせ今日は何して遊ぶかって話だろ。」

「

聞いていないながらも、だいたい話の内容を把握していたといひは、いかにも彼らしかつた。

「おい灰原も考えようぜ。」

同じく話し合いに参加していない彼女へ元太が言つ。彼女も、中身と外見が違う。そして彼女も彼らと同じ探偵団に入っていた。

「あたしはバス。昨日から風邪気味で少しだるいの。」

「えー、そなんだ。残念。」

「灰原さん大丈夫ですか?」

残念がる歩美と、彼女を少なからず意識している光彦が心配する。

「ええ、大丈夫よ。雪が降っているなら外で雪合戦でもしてきいたら？」

遊びに参加しない代わりに予定の案を上げた。

「おい、風邪つてホントなんだろ？」

思いつきり子供の遊びに参加しないことを、まさか抜け駆けではないかと、彼が問うてきた。実際彼はまだ子供の部類に入るが、小学生に交じって遊ぶなど、なんとなくプライドが許さないのだ。

「あら、疑つてるの？ 風邪気味なのは本當よ。」

まだ疑う彼をたしなめるように笑いながら言った。

「煮詰まつてもしかたないでしょ。その内彼らの情報が入るわよ。ほら、もうみんな外にでてるわよ。一緒に遊んできなさいよ。」
どうせ暇なんでしょう、とニヒルな笑いを浮かべながら続けて言った。
あのなあ、といなながら彼はしづしづ、先に行つた彼らのあとを追つた。

雪をこんなふうに遊びで触るのはかなり久しぶりだった。
雪合戦をやり始めた3人を横目に、彼はそつと雪を握つた。
思わずつめてー、と声が漏れた。

平和なのはいいことだ。このまま平穀に暮らせたら、とふと思つこともある。しかしそうはいかないし、そうしているわけにもいかない。

い。 じうじている間にも、と焦りを感じていることもある。 今の彼にとつて平穏であり続けることはない。 また平穏であり続けることもない。

自ら壊しにいくか、壊されるか。 その一つ。

また生きるか、殺されるかの二つ。

だから彼にとつて平穏は、悩みの時間でもあった。

そんなことを真剣に考えていたとき、少女に名前を呼ばれた。 なん? と、顔を上げたとたんに顔面に切れるような冷たさを感じた。

雪玉だ。 そう思つのに時間はからなかつた。

「おい、コナン! 何ぼーっとしてんだよ。」「逃げないと、当たっちゃいますよ。」

そういうながら雪玉を彼にむかつて投げる一人をよそに、笑つている少女。

「あはははー、コナン君、雪につけられてるよ。」

何か吹つ切れたような気がした。

雪のせいか、彼らの楽しそうな雰囲気のせいかはわからないが。 平和なら、そんな今を堪能してやるーじやねーか、そんなことを思い、彼は雪をまるめはじめた。

「あらあら。 随分と楽しんでるのね。」

うらやましいかぎりだわ、彼女はそう言いながら曇った窓を指でなぞった。

「よかつたわい。最近、心なしか新一君は元気がないよ」じゅうじゅうからう。「

この家の主人が言った。

事件があつた方が、彼らしく生きられるのかもね、そう思いながら彼女は、そろそろ帰つてくるであろう彼らを思い、お湯を沸かしあげ始めた。

外をもう一度見れば、さつきの「プライドはまだ」へいったのやうに、いかにも楽しそうな彼の姿があった。

まだまだ彼は子供なのだと改めて思う彼女だった。

(後書き)

もしよろしければ、感想をお願いします(・・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3692d/>

雪合戦

2011年2月3日13時18分発行